

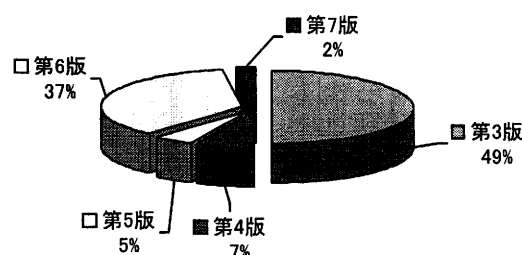
## 第2章 書きかえられたもの

『昔話集』各版の綿密な比較研究は、『昔話集』の最終版が刊行されてからおよそ半世紀後の20世紀初頭から始められた。包括的な研究の嚆矢は、フランスのトヌラ (Ernest Tonnelat) によるものである。トヌラは初版から第7版 (最終版) までを全般的に詳しく比較考察し、グリム兄弟の加筆の特徴を1912年の論文にまとめたのであった (Tonnelat 1912)。

トヌラの考察によれば、第2版刊行の際に行なわれた変更が最も数が多いのだが<sup>1</sup>、それは、昔話の根幹にかかわる変更——いわば主題 (テーマ) の選択やエピソードの並べ方に関する変更 (混交<sup>2</sup>など) ——が多いため、数値化は断念している。しかし第3版から第7版刊行時には、合計649箇所の変更がなされたとの結果を導き出している。

トヌラの結論を表にすれば以下ようになる。(トヌラの指摘をもとに、西口が作成した。)

第3版	325
第4版	43
第5版	30
第6版	237
第7版	14
合計	649箇所



つまり、第2版以降で大きな変更が行われたのは、第3版と第6版の刊行時ということになる<sup>3</sup>。トヌラが何をひとつの変更と見なして数値化したのかということは、残念ながら明記されていない。しかし、少なくとも各版の間で変更の量にどういったばらつきが見られるかということを知る目安にはなっている。

トヌラが扱ったのは、実際に出版された7つの版であり、グリム兄弟が1810年にブレンターノに送った手稿は考察の対象としていない。そこで、ドイツのフライターク (Elisabeth Freitag) が、手稿と初版第1巻 (1812年版) との比較を試み、1929年に発表している (Freitag 1929)。これはトヌラの研究を踏まえて、それを補完すべく行なわれたものである。

一方、ほぼ時を同じくしてドイツのシュミット (Kurt Schmidt) が研究を進めており、1932年に論文を発表した (Schmidt 1932)。シュミットも、トヌラの研究では対象外とされていた1810年手稿を考察対象に含めている。シュミットは自分の論文が印刷される間にフライタークの論文を知ったため、内容に関する言及はしていない。さてこのシュミット

<sup>1</sup> 『昔話集』の第2巻 (1815年) よりも、第1巻 (1812年) の方が多く変更された。

<sup>2</sup> ドイツ語では Kontamination と言う。グリム兄弟は、類話同士をつなぎ合わせてひとつの昔話にすることも多かった。

<sup>3</sup> 第2版以降、最終版までの変更全体のおよそ半分が第3版の刊行時に、そして残りのうちの3分の2が、第6版刊行時に行なわれた。

の論文で特徴的なのは、そのアプローチの仕方である。全話を 1810 年手稿と初版に限って考察したフライタークと異なり、シュミットは、1810 年手稿に収録されていた話のうち、最終版まで削除されることなく残された話に限定し、その 19 話を「小さい版」も含めたすべての版 (計 17 版)<sup>2</sup>にわたって比較した。彼は、各版の相違点を音楽のスコアのように並べて呈示しているが、見通しの良いものにはなっていない。

ところで、フライタークとシュミットが新たに考察に加えた 1810 年手稿は、ブレンターノのために書き留めただけのものであり、断片的なメモという性格が強いものである<sup>3</sup>。出版のための校正作業が行なわれておらず、「そして」(und) の多用が目立つなど、全般的に文章の流れがたどたどしい。そうした性質の原稿であったため、それを『昔話集』初版として出版する際には、大きく手が加えられたのも不思議ではない。実際に 1810 年手稿から初版刊行の段階で 2 倍以上の長さが増えたテキストもあるほどなのだ。

本章の各節では、主に上記の 3 本の論文を中心に、その他の先行研究の成果も盛り込みながら、実際にどのような書きかえが行われたのかを見ていくことにする。特にトヌラの論文はフランス語で書かれていることもあり、日本ではこれまでほとんど言及されてこなかった。また、フライタークも目立たない博士論文であるため同様である。この両論文は、グリム兄弟による加筆を語る上で看過されてはならないものである。本節では、これらの研究の成果を総括し、いくつかの点にしぼってグリム兄弟の書きかえの全体像に迫ろうとする<sup>4</sup>。なお、今後の研究にとって有用と思われるその他の具体例も本論付属の『別冊資料』に掲載する。また、初期の研究には欠けていた社会史的な視点からグリム兄弟の書きかえ

<sup>1</sup> 39 話のうち 19 話。ヴィルヘルムが担当した話のうち、6 話は途中から採用されなくなったなどの理由で考察対象から外された。また、ほとんど変更されていない 2 話も除外している (Schmidt 1932 S. 3)。

<sup>2</sup> その中には「小さい版」には収録されていない昔話も含まれている。その場合は「大きい版」のみを扱っている。

<sup>3</sup> この手稿の性格を、シュミットは次のように言い表している。「ヤーコブが書き留めた 27 話のうち 11 話が断片的であり、ヴィルヘルムの 14 話のうち「ぬけ作」(Dümmling) と「白鳥王子」(Prinz Schwan) の 2 話が断片的である」(Schmidt 1932 S. 21)。

<sup>4</sup> 補足として、グリム兄弟の書きかえに関して日本語で読むことのできる論文を紹介しておく。日本では、ひとつの話に着目しての各版の比較は盛んに行われているのである。

小澤の『グリム童話考』(小澤 1999) では、「いばら姫」(KHM 050) と「白雪姫」(KHM 053) の 1810 年手稿、初版、第 2 版、最終版が詳しく比較、考察されている。これらは、初期の語り手による話であり、後にグリム兄弟によって非常に手が加えられた昔話の例である。『グリム童話の誕生』(小澤 1992) においては、グリム兄弟があまり手を加えなかった話として、「がちょう番の娘」(KHM 089) の初版から最終版までの全版が考察されている。また、文献から再話した「天国の仕立て屋」(KHM 035) と「ラプンツェル」(KHM 012) の全版を比較しつつ、合わせて原典とも比較している。

虎頭は、「猫と鼠の共ぐらし」(KHM 002, 虎頭 1991)、「星の銀貨」(KHM 153, 虎頭 2000) についての手稿から最終版までの各版を綿密に比較考察している。さらに間宮も「赤ずきん」(KHM 026) の初版から最終版までの詳しい比較を行っている (間宮 1998)。

アメリカのエリスも、大きな変更のあった版を選び出し、「蛙の王様または鉄のハインリヒ」(KHM 001) の手稿、初版、第 2 版、第 3 版、「いばら姫」(KHM 050) の手稿、初版、第 2 版、第 6 版、「ヘンゼルとグレーテル」(KHM 015) の手稿、初版、第 2 版、第 5 版を比較している。これも翻訳されているため、全編の比較を日本語でたどることが出来る。

を考察したものは、第4節でまとめて扱う<sup>1</sup>。

なお、トヌラの引用は、原典でßとなっているところをssと表記するなど、不正確なところがあるため、レレケによる校訂版やゲッティンゲンの昔話百科辞典編纂所所蔵の原典で確認し、西口が訂正した。『昔話集』の第4版、第5版、第6版は、復刻されておらず、閲覧が困難であるため、出来るだけ『別冊資料』の例でとりあげるようにした。第何版において加筆が行なわれたのかという点についても逐次確認し、トヌラにおける誤記を訂正した。以下、グリム『昔話集』からの引用(翻訳)文中のイタリック及びゴシック部は西口によるものである。

## 第1節 民衆らしさを増した加筆

諺や、民衆の独特の言い回しにはいつも耳を傾けており、それらを挿入することにしたゆむことなく努めてきた (Grimm 1980 Bd. 3 S. 27)。

グリム兄弟は『昔話集』第6版の序文の中で、上記のように述べている。実際に、多数の諺や慣用表現が、改版の過程で昔話の中に取り入れられていったのである。それを項目ごとに列挙してみよう。

### 1. 諺

例えば、「類は友を呼ぶ」(gleich und gleich gesellt sich gern) という諺が、改版の際に「ものぐさハインツ」(KHM 164) のテキストの中に盛り込まれた(その他の例は『別冊資料』を参照のこと。以下の項も同様)。

『昔話集』の中にある諺についての詳しい研究は、レレケ (Rölleke 1988)<sup>2</sup>、ミーダー (Mieder 1986) などがある。レレケは、グリム『昔話集』の中では、およそ420の諺が用いられており、そのうちの35は2回以上、さらにそのうちの18は3回以上用いられているため、実際の例はおおよそ600あると指摘している (Rölleke 1988 S. 20)。

### 2. 慣用表現

同様にグリム兄弟が昔話の中に積極的に盛り込んでいたものに、慣用表現がある。例えば、「強盗のお婿さん」(KHM 040) においては、「出かける」(fort gehen) という動詞が、同じ意味の慣用表現 (sich auf den Weg machen) に変えられている。また「腕利きの4人兄弟」(KHM 129) においては、「認める(白状する)」(gestehen) の代わりに「褒めちぎる、オーバーにたたえる」(jemanden über den grünen Klee loben) という表現が用いられるようになっている。

<sup>1</sup> 本章第4節は、東京外国語大学大学院に提出した修士論文(西口 1997a)をまとめなおしたものである。

<sup>2</sup> このレレケの研究の一部は岡本の論文(岡本 1998)に紹介されている。岡本は、レレケの研究からKHM 001, KHM 015, KHM 020, KHM 021, KHM 027, KHM 053, KHM 055の部分を選び、日本語で紹介している(岡本 1998 S. 254ff.)。

### 3. 比喩

グリム兄弟は、比喩表現も非常に好んで取り入れている。「狼と7匹の子やぎ」(KHM 005)には、狼の腹から脱出した子やぎたちが喜んで飛び跳ねる場面があるが、第5版よりそこに、「結婚式を挙げる時の仕立て屋みたいに」(wie ein Schneider, der Hochzeit hält) という比喩表現が付け加えられた。

グリム兄弟がこうして付け加えた言い回しは、別の話や、他の文献の中から拾い出したものであることが多いようだ。「勇敢なちびの仕立て屋」(KHM 020)では、仕立て屋が自分の勇敢さに独りで悦に入っている場面に、「そして仕立て屋の心は、嬉しさのあまり、子羊のしっぽのようにふるえました」という表現が第2版より付け加えられた。これは、レレケによれば、ヴィルヘルムが当時読んでいたバロックの小説に出てきた表現を利用したものだという (Rölleke 1986 S. 91)。

### 4. 反語

反語的な表現もしばしば付け加えられている。「灰かぶり」(KHM 021)においては、継母とふたりの継姉は、灰かぶりから美しい洋服を奪い取り、灰色の古い上着と木の靴を与えている。そして灰かぶりを笑いものにする場面に、次のように嫌味たっぷりの反語的な表現が、第6版から書き加えられたのである。

#### 第2版

継姉たちは灰かぶりからきれいな洋服を奪い取り、灰色の古い上着を着せました。そして灰かぶりを笑いものにして、台所へ連れて行きました (S. 101)。

#### 第6版

継姉たちは灰かぶりからきれいな洋服を奪い取り、灰色の古い上着を着せ、木の靴を与えました。「ちょっと、あの気位の高い王女さまをごらんよ！おめかししてるわよ。」と大声で言って、笑って、灰かぶりを台所へ連れて行きました (S. 136)。

こうして継姉たちの意地の悪さが強調されたのであった。

### 5. 二重表現

次節で考察するように、グリム兄弟は、近い場所で同じ言葉が不必要に繰り返し用いられることは避けたのだが、表現を重ねること——つまり同じ言葉や同義語を意図的にリズムカルに復唱すること——は好んでいる。

1810年手稿から初版の間には、全く同じ言葉を繰り返す表現が用いられている。例えば「7羽の鳥」(KHM 025)の1810年手稿においては、「人くさいぞ」(ich rieche Menschenfleisch)のように一度しか動詞が用いられていなかったが、初版より動詞が復唱されるようになり、「人くさい、人くさいぞ」(ich rieche, rieche Menschenfleisch)<sup>1</sup>となった。

しかし第2版以降の改訂作業では、同じ語ではなく同義語が重ねられることが多くなっている。例えば「がちょう番の娘」(KHM 089)では、魔力のある布を紛失してしまった王

<sup>1</sup> 同じ表現が KHM 029 でも用いられている。

女は、第2版では「弱く (schwach) なってしまった」と表現されていた。これが、第3版からは「弱くなって、力を失って (schwach und machtlos) しまった」と、同義語をふたつ重ねた表現に変えられたのである。

## 6. 韻

さらに、韻を踏んだ表現も好まれている。「背蓑と帽子と角ぶえ」(KHM 054) では、兄ふたりは「贅沢に暮らし」(herrlich leben) ているのだが、この表現は第3版より「贅沢三昧に暮らす」(in *Saus und Braus* leben) に変更された。

また「金の山の王様」(KHM 092) においても、(もらう約束の)「お金は見あたらなかった」(kein Geld sah) という表現が、第6版より「大箱・小箱の中にお金は見つからなかった」(kein Geld in seinen *Kisten und Kasten* fand) と変更されている。

## 7. 擬音語

擬音語は、フライタークの指摘によれば、1810年手稿には一つもないが、初版以降に取り入れられたものである (Freitag 1929 S. 69)。

そして「蛙の王様または鉄のハインリヒ」(KHM 001) では、蛙が階段を昇る際の音が、初版より「ピチャッ、パチャッ！」(plitsch, platsch!) と描写されるようになっている。フライタークは、これは蛙が跳ぶ様子をうまく描写している、としてこの加筆を評価している (Freitag 1929 S. 69)。また擬音語に関しては、ショーフなどにも指摘がある (Schoof 1959 S. 178)。

## 8. 愛称

改版の過程でグリム兄弟はあだ名や愛称を昔話の中に盛り込んでいる。「蛙の王様または鉄のハインリヒ」(KHM 001) の蛙は、第3版より「水のぱしゃつかせやさん」(Wasserpatscher) と呼ばれるようになっているし、「プレーメンの音楽隊」(KHM 027) では第4版より、「狐と猫」(KHM 075) では第6版より、猫が「髭なでやさん」(Bartputzer) という愛称で呼びかけられるようになっている。

## 9. 印象的なフレーズ

グリム兄弟は、ひとつの話の中で、同じフレーズを効果的に繰り返し用いている。

「つぐみのひげの王さま」(KHM 052) では、王女は父王の怒りを買って、乞食と結婚させられてしまう。城を去り、森を歩いていく時に、王女は夫に向かって、次のような嘆きの (韻を踏んだ) 言葉を口にする。

「ああ、なんてか弱い、かわいそうな娘の私。つぐみ髭の王様を選んでおけばよかったわ！」(ich arme Jungfer *zart*, ach hätt' ich doch genommen den König *Drosselbart!*) (S. 116)

1810年手稿においては、その後の描写は「ふたりが草原を通り過ぎるときも、町を通り過ぎるときも、同じような具合でした」という一文によって片付けられていた。しかし初

版以降は、王女が口にしていた上記の嘆きのフレーズが、さらに二度繰り返されるようになっていく。

また、印象的なフレーズを他の類話などに見つけた場合には、グリム兄弟は積極的にそれを取り入れている。「ヘンゼルとグレーテル」(KHM 015)には、子どもたちがお菓子の家をかじっていると家の中から「ぽりぽり、ぽりぽり！ 私の家をかじるのは誰だ！」(«Knuper, knuper, Kneischen! Wer knupert an meinem Häuschen!»)という声がする場面がある。そこに返答としての「風だよ！風！ 天の子だよ！」(«Der Wind! der Wind! Das himmlische Kind!»)というフレーズが付け加えられたのは、第2版からであった。

こうしたフレーズに関しては、フライタークやショーフにも言及がある (Freitag 1929 S. 67f., Schoof 1959 S. 178)。

## 10. 発端句と結末句

昔話の導入部に頻繁に用いられている「むかしむかしあるところに」(Es war einmal) という発端句もまた、改版の過程で好んで取り入れられていったもののひとつである<sup>1</sup>。

同様に結末句も、初版以降頻繁に付け加えられている。グリム兄弟は、「もしふたりが死んでいなければ、まだ生きていますでしょう」(wenn sie nicht gestorben sind, so leben sie noch) という表現<sup>2</sup>よりも、「そしてふたりは死ぬまで楽しく暮らしました」(sie lebten vergnügt bis an ihr Ende)<sup>3</sup>の方を好んでいる。

これら発端句は、現実の世界から昔話の世界へと聞き手を導く働きをし、結末句は、昔話の世界から現実の世界へと連れ戻す働きをするもので<sup>4</sup>、グリムに限らず昔話一般で広く使われているものである。

## 11. 語り手の介入

語り手自らが聞き手に問いかけたり、自分の意見を述べたりする箇所が、グリム兄弟によって付け加えられた。

例えば「つぐみのひげの王さま」(KHM 052)の最後に、第2版からは次のようなちよつとしたフレーズが付け足されている。

### 初版

それから父親とお城の人たちがみなやって来て、彼女は身分にふさわしく美しく着

<sup>1</sup> 最終版では200番までの話のうち67話がEs war einmalという発端句で始まっている。そのうち3話は子どものための聖者伝である。1810年手稿のうち、ヤーコプが書き留めたものの中にはEs war einmalと始まるものは15話、ヴィルヘルムでは6話ある (Schmidt 1932 S. 8)。

<sup>2</sup> 最終版では以下の2話で用いられているのみである。und wenn sie nicht aufgehört haben, so tanzen sie noch. (KHM 038, S. 215), und wenn sie nicht gestorben sind, leben sie noch. (KHM 051, S. 263)

<sup>3</sup> 最終版では以下の8話で用いられている。und sie lebten vergnügt bis an ihr seliges Ende. (KHM 031), (sie) lebten vergnügt bis an ihr Ende. (KHM 050, KHM 071, KHM 125), sie lebten vergnügt bis an ihren Tod. (KHM 065), die Armen aber lebten vergnügt, still und fromm bis an ihr seliges Ende. (KHM 087), sie lebten vergnügt miteinander bis an ihren Tod. (KHM 122), sie lebten von nun an vergnügt bis an ihr Ende. (KHM 088)

<sup>4</sup> ミハイ・ポップの指摘による (Lüthi 1975 S. 144f.)。

飾られ、祝宴はつぐみ髭の王様との結婚式になりました (S. 121)。

## 第 2 版

それから侍女たちがやって来て、王女に豪華な衣装を着せました。そして王女の父親とお城の人たちがみなやって来て、つぐみ髭の王様との結婚を祝いました。こうして本当の喜びがその時やっとはじまったのでした。私も、あなたも、そこに居合わせなかったね (S. 223)。

参考までに指摘するならば、ヤーコプが『ペンタメローネ』の「蛇」をドイツ語に訳し、ドイツの昔話風に語り直した時にも、こうした語り手の言葉を加えている (Ginschel 1963 S. 141)。

## 12. 縮小辞

「7羽の鳥」(KHM 025)のように、1810年手稿の段階より縮小辞 (*lein* や *chen*) が多用されていた昔話もあるが、グリム兄弟の書きかえによって、縮小辞が用いられるようになった場合もある。「白雪姫」(KHM 053)の小人の家にある「テーブル」(*Tisch*)や「スプーン」(*Löffel*)は、初版より「小さな机」(*Tischlein*)、「小さなスプーン」(*Löfflein*)というように縮小辞の付いた形に変えられた。

ただしシュミットは、縮小辞 (*chen*) が取り除かれる場合もあったという指摘をしている。例えば「猫と鼠の共ぐらし」(KHM 002)では、*Kätzchen* (子猫) が *Katze* (猫) に変えられた。これは、かわいい子猫の話ではなく、友である鼠を裏切り最後に飲み込んでしまう猫であるため、縮小辞にそぐわないと判断したのだろう。また、「わらと炭と豆」(KHM 018)においても、1810年手稿の題は「小さなわらと小さな炭と小さな豆の話」(*Von dem Strohalmchen dem Köhlchen und dem Böhnchen*)であったが、初版では「わらと炭と豆の旅」(*Strohalm, Kohle und Bohne auf der Reise*)となり縮小辞が削除された<sup>1</sup>(Schmidt 1932 S. 54)。

## 13. 外来語を取り除いた

グリム兄弟は、『昔話集』第2版の序文で次のように述べている。

この昔話集のために私たちがこれまでに手に入れたものを、この第2版に取り入れようと努めました。そのため第1巻は、ほとんど全てが改作されました。不完全なものには付け足され、多くのものがより単純で純粋になりました。よりよい形になっていない話はほとんどないでしょう。そして疑わしいものは、もう一度考察しました。つまり、外国の起源だとか、付加された物によって変造された疑いのあるものは全て取り除きました (Grimm 1980 Bd. 1 S. 20f.)。

グリム兄弟は改版の過程で昔話に何らかの要素を付け足すことが多かったのだが、逆に取り除いた場合もある。とりわけ外国起源のものである。グリム兄弟は、外国起源と思われた話 (例えばペローの話に酷似の「長靴を履いた猫」と「青ひげ」や、スコットランド

<sup>1</sup> 最終版では、「わらと炭と豆」(*Strohalm, Kohle und Bohne*) となっている。

起源の「包丁を持った手」などを第2版の段階で削除している。そして、昔話中で用いられている外来語もドイツ語に言い換えているのだが、中でも目立ったのがフランス語である。これに関しては、多くの研究者による指摘がある (Tonnelat 1912 S. 101ff., Schoof 1959 S. 178, Lüthi 1996 S. 54, Tatar 1987 S. 31 など)<sup>1</sup>。

例えば、「ラプンツェル」(KHM 012) 中の意地悪な Fee (仙女) は、Zauberin (魔女) に、「いばら姫」(KHM 050) 中の親切な Fee (仙女) は、weise Frau (賢い女) に言い換えられている<sup>2</sup>。

さらに Prinz (王子) は「蛙の王様または鉄のハインリヒ」(KHM 001) では Königssohn (王子) に、そして「マリアの子」(KHM 003)では Sohn (息子) と言い換えられるなどしている。同様に Prinzessin (王女) は「12人の狩人」(KHM 067)では Königstochter (王女) となり「金の山の王様」(KHM 092)では Jungfrau (乙女) などと言い換えられている。

このように、諺、慣用表現、二重表現 (冗語法)、比喩などが昔話に取り入れられたことに対して、トヌラもフライタークも、それらは語り手も好んで昔話に盛り込む類のものであり、グリム兄弟は民衆的な語り近づけるためにそれをなしたのだ、と解釈している (Tonnelat 1912 S. 162, Freitag 1929 S. 57, 69, Bluhm 1995 S. 25ff.)。

また既に指摘したように、語り手が「私も、あなたも、そこに居合わせたかったね」などと聞き手に語りかけたり、自分の意見を述べたりする箇所をグリム兄弟は好んで付け加えているが、トヌラは、こうした語り手による介入も、昔話を生き生きとさせたと思なしている。そうした介入が行なわれるのは、たいてい非現実的な状況においてであり、それが、聞き手の心に現実的な感情を呼び起こし、快いコントラストを生むというのだ (Tonnelat 1912 S. 147)。フライタークも同様に、グリム兄弟によるこうした加筆は、昔話をより民衆的にしたと評価している (Freitag 1929 S. 73)。

このように、初期のグリム研究においては、グリム兄弟による加筆は概ね肯定的に評価されていたのである。

民俗学において、収集の際にカセットテープなどが使用され始め、昔話が厳密に収集されるようになっていったのは、ようやく 1930 年代になってからである。そのため、トヌラ (1912 年) やフライターク (1929 年) らの研究においては、こうした民衆的な要素をグリム兄弟が取り入れたことばかりが着目され、彼らが昔話を民衆的なものに近づけた、と好意的な評価をしているのも無理はないことなだろう。

実際、本節で取り上げたような加筆を行うことによって、昔話としての「信憑性」は失

<sup>1</sup> 「子どもたちにふさわしく、また親にとっても魅力的な本を作りたいという気持ちに加えて、グリム兄弟には、ドイツの民衆文化の史料を、最も望ましい形で人々に与えたいという気持ちがあった。そのため全てがよりドイツ風になるように、妖精 (Fee) を魔女 (Zauberin) か賢い女 (weise Frau) に、プリンス (Prinz) を王子 (Königssohn) に、プリンセス (Prinzessin) を王女 (Königstochter) に、というように、よりゲルマン的に響く言葉に変えている。さらに民衆的な性格を昔話集に添えるために、諺を加えた」(Tatar 1987 S. 31f.)。

<sup>2</sup> Fee の書きかえについては大淵の研究がある (大淵 1995)。賢い女 (賢女) は「善」の女性として登場し、その対極に「魔女」や「魔法使いの女」という女性が位置させられた (大淵 1995 S. 104)。ただし、「いばら姫」においては、いばら姫が紡錘に刺されて死ぬという悪い予言をする Fee も「魔女」ではなく「賢い女」と言い換えられている (大淵 1995 S. 96f.)。



われるかもしれないが、昔話らしさが損なわれることにはなっていない。例えば、本節で考察した「つぐみのひげの王さま」(KHM 052) の例では、初版以降、同じフレーズが繰り返し用いられるようになっていたが、これに対して小澤は、写実的な文学でならば稚拙と言われかねないところだが、口承の昔話の法則には適っている、という指摘をしている (小澤 1998 S. 71)<sup>1</sup>。

## 第2節 読みものとしての体裁を整えた加筆

さて、グリム兄弟は『昔話集』を改版するにあたって、読みものとしての体裁を整え、読みやすいものにするよう心掛けてもいる。本節では、そうした観点から行われた書きかえを、いくつか項目をたててまとめて考察しておく。

### 1. 同じ言葉の頻出を回避した

前節において指摘したように、グリム兄弟は意図的に同じ言葉を繰り返すことによってリズムカルな表現を作り出していたが、近い場所で不必要に同じ言葉が何度も用いられている場合には、それを削除している。こうした不必要な繰り返しは、口頭で語られる昔話には頻繁に見られるものであるが、グリム兄弟は改版の際に減少させたのである (Vgl. Tonnelat 1912 S. 182f.)。

例えば「12人の兄弟」(KHM 009) の1810年手稿では、「言う」(sagen) という動詞が立て続けに3度用いられている場面があったが、初版ではそれが1回に減少されている。

### 2. ニュアンスのある言葉に変えた

グリム兄弟は、動物や登場人物の性格を鮮明に浮かび上がらせる効果のある言葉を選んで用いている。例えば、「ズルタンじいさん」(KHM 048) においては、狼の歩く様子が「出かけていく」(ging) から「こっそり出かけていく」(schlich) という動詞に変更されており、「ふしぎな楽人」(KHM 008) では、子兎は「跳ねてやってくる」(daher gelaufen) から「びよんびよん跳ねてやってくる」(daher gesprungen) に変更されている。

これは、創作文学に近づいたと見なすことも出来る加筆であるが、同じ言葉の頻出を回避するために行われている場合も多いため、本節で扱った。

### 3. 専門的な言葉を用い、説明した

グリム兄弟は、道具に関しても、より状況に適した物を登場させるべく努力をしている。

「テーブルよご飯のしたくと金貨をはくろばと棍棒袋からでろ」(KHM 036) の仕立て屋は、息子を追い出す時に棒 (Stock) という一般的な物を振り回していたのだが、第3版よりエレ尺 (Elle) という仕立て屋専用のものでさしを用いるようになっている。

一方で、グリム兄弟は、一般の人々には理解されないであろう専門的な言葉に関する説

<sup>1</sup> その他、「がちょう番の娘」(KHM 089) でも、グリムが出来事を具体的に反復している箇所に対して、こう述べている。「ここに全訳した一八四〇年版の三九段落のように、できごとを具体的に反復した方が、はるかに効果的なのです。口伝の文芸としてよくできているといえま

明を加えてもいる。「かしこいちびの仕立て屋の話」(KHM 114)においては、「それは、黒と白でしょう。〈キャラウェーと塩〉と同じような」という喩えが用いられているのだが、その説明として第6版より、「それは黒と白でしょう。〈キャラウェーと塩〉と呼ばれている服地と同じような」という説明が付け加えられた。

#### 4. 文法的な間違いや不正確なものを訂正した

初期の版においては見逃されていた間違いや不正確な表現は、発見され次第に訂正されている。「灰かぶり」(KHM 021)における、灰かぶり (Aschenputtel) という名前は中性名詞であるため、所有冠詞は *sein* を用いなくてはならないのだが、第2版では女性名詞に用いる *ihr* が用いられていた。これは第3版で訂正された。こうした間違いは同じく中性名詞の「少女」(Mädchen) などの場合にも、実際の性 (=女性) が想定されるために、特に口頭ではしばしば起ることである。

その他、不正確なところが修正され、例えば、数に関しても出来るだけ厳密にする試みがなされている。「白雪姫」(KHM 053) の1810年手稿では、小人は7人いるが、「私の皿から食べたのは誰だ?」「私のパンを食べたのは誰だ?」といった言葉を口にしていたのは5人だけであった。初版からは、7人全員にそのせりふが与えられている (Freitag 1929 S. 45)。

さらに、指示しているものが明確でない代名詞も書きかえられた。例えば「ぞっとすることをおぼえるために旅に出た男の話」(KHM 004) のある箇所には代名詞の *er* がふたつ連続して使われていたのだが、ひとつめは大男、ふたつめは主人公の若者というように、別の人物を指し示していた。そのため第6版以降は、後者を「若者」(der Junge) と言い換えることで誤解が生じないように工夫がなされている。

#### 5. 鈍重な文章をすっきりとさせた

さらに、重い冠飾句などがパラフレーズされ、すっきりとした文章になっている。例えば「3人の糸紡ぎ女」(KHM 014) の第2版の、「彼女が叩く度に、実に見事に紡がれた糸がたくさん床に落ちました」(... so oft sie schlug, fiel eine Zahl aufs feinste gesponnenen Garns zur Erde.) という冠飾句が、第3版にて「彼女が叩く度に、糸がたくさん床に落ちました。それは実に見事に紡がれていました」(... so oft sie schlug, fiel eine Zahl Garn zur Erde, und das war aufs feinste gesponnen.) とパラフレーズされた (Tonnelat 1912 S. 194)。

#### 6. 多用されている接続詞などを整理した

1810年手稿は、出版するために書き留められたものでないという事情もあり、文章としては稚拙な箇所がかなり目につく。例えば、「そして」(*und*) や「それで」(*so*) といったつながりの言葉が目立って多く用いられている。このように、話の中に「でも」「さて」「それから」などの接続詞を多用してしまうのは、ごちない (下手な) 語り手のすることだと、フライタークは指摘している (Freitag 1929 S. 83)。グリム兄弟も同様に考え、「ところが」(*aber*)、「そして」(*und*)、「さて」(*nun*)、「そこで」(*da*)、「ああ」(*ei!*) といった接続詞や間

す」(小澤 1992 S. 174)。

投詞が頻出することのないように手を加えている<sup>1</sup>。

## 7. 話が飛躍しているところを補った

グリム兄弟は、筋の展開が飛躍している部分を補っている (Ginschel 1963 S. 133)。そうすることで、出来事の経過を見通しよく理解しやすいものにしたのである。

1810年手稿の「ヘンゼルとグレーテル」(KHM 015)では、置き去りにされたヘンゼルとグレーテルが森の奥に入っていく場面は、突如3日目に話が飛躍していた。それが初版では以下のように、間を埋める描写が加えられたのである。

### 1810年手稿

ふたりはどんどん奥へ行きました。そして大きな森の中に迷いこんでしまいました。

3日目にふたりは小さな家にたどり着きました (S. 74)。

### 初版

ヘンゼルは家へ帰る道が見つかるだろうと思って、グレーテルを連れて行きました。でもふたりはまもなく大きな原野の中に迷いこんでしまいました。そして**その夜も次の日もずっと**歩きました。そしてふたりは疲れて眠りこんでしまいました。それからもう1日歩きました。でもふたりは森から抜け出すことは出来ませんでした。そしてとてもおなかが空きました。なぜならふたりには、地面に生えている少しの野イチゴ以外には食べるものがなかったからです。3日目にもふたりは**お昼頃まで**歩きました。すると小さな家に着きました (S. 54)。

## 8. 間接語法を直接語法に書きかえた

1810年手稿では直接語法はほとんど見られなかったが、初版以降、特に第2版以降は、頻繁に直接語法が用いられるようになっている (Tonnelat 1912 S. 86, Freitag 1929 S. 60, Lüthi 1996 S. 54, Ginschel 1963 S. 133, Schoof 1959 S. 178 など)。それに伴い描写も増えているのだが、これに関しては次節で取り扱う。

「12人の兄弟」(KHM 009)では12人の兄らは、妹が誕生したために自分たちの命が脅かされることになる。1810年手稿では、12人の反応は「ひどく腹を立てました」(*wurden recht erzürnt*)と描写されるだけであった。しかし初版では「みなは怒り、『僕たちがひとりの女の子のせいで命を失わなくてはならないとは!』と叫びました。」(*wurden sie alle zornig und riefen: „sollen wir eines Mädchens willen das Leben verlieren!“*)と変更された。これに対してフライタークは、*daß* を用いた従属節で表現するよりも直接語法で叫ぶ方が、怒りがよりよく表される、そして「腹をたてた」(*wurden erzürnt*)という表現も彼らの年齢にも感情にも見合っていないので、グリム兄弟が「怒った」(*wurden zornig*)に変更したのだという指摘をしている (Freitag 1929 S. 23)。

直接語法やモノログという形で、登場人物の感情や考えていることが加筆される場合

<sup>1</sup> ただし、リュウティの次のような指摘もある。「こういった日常的な決まり文句は、たいていの昔話の本では編者によって切り捨てられてしまっているが、適度に用いられれば、休止となりアクセントとなる」(Lüthi 1975 S. 58)。グリム兄弟も全部切り捨ててしまったわけではなく、

もあるが、これに関しても詳しくは次節で扱う。しかし文章に書きおこしたためにこうした推敲がなされたという観点から、この書きかえは本節で取りあげた。

## 9. 順序を合理的にした

ここでは、「兄と妹」(KHM 011) の例を見てみたい。継娘は王と結婚して子どもを生む。以下は、それを妬んだ継母 (魔女) が実の娘とともに城にもぐりこみ、妃 (継娘) をお風呂で窒息死させ、立ち去る場面である。

### 初版

そしてふたりは妃を風呂場に連れて行きました。妃が中に入ると、ふたりは妃の後ろで戸を閉めました。中には地獄のような火を炊いておいたので、美しい妃は窒息してしまいました (S. 37)。

### 第2版

そしてふたりは弱った妃を風呂場へ担いで行きました。そして彼女を中に横たえると、ふたりはすばやく立ち去り、戸に鍵をかけました。ところでふたりは、風呂場に地獄のような火を焚いておいたので、若く美しい妃はたちまち窒息してしまいました (S. 59)。

### 第6版

ふたりは、体の弱っている妃を風呂場に担いでいき、湯船に横たえました。そしてふたりは戸に鍵をかけ、逃げ去りました。ところでふたりは風呂場に地獄のような火を焚いておいたので、若く美しい妃はたちまち窒息してしまいました (S. 70)。

この話では、第2版で「すばやく立ち去り」という臨場感をかもし出すような表現が加えられたが、そのために、ふたりは立ち去ってから (浴室の) 戸を閉めるという不自然な順序になってしまった。よって第6版で上記のように変更され、戸を閉めてから走り去る、という合理的な順序に変更されたのである<sup>1</sup>。

## 10. 状況をより現実的にした

例えば、「6羽の白鳥」(KHM 049) には、妃をおもしろく思わない姑がいる。姑は生まれただけの子どもの命を奪い、妃の口に血を塗り、妃が生んだ子を食べてしまったかのように見せかける。この場面には、妃は「寝ている間に」血を塗られたということが第3版より書き加えられた。さもなければ、妃が抵抗せずに血を塗られるままにすることは不自然だからである。

本節で取りあげたような加筆を詳しく考察していくと、とりわけ1810年手稿が概略のメモのようなものであったため、出版の際にはそれを普通の文章におこす必要があったことが分かる。このことに対してフライタークは、手稿は筋が飛躍している場合も少なくない

---

多すぎると判断したものを削除した。

<sup>1</sup> これは、小澤 1996 S. 158 の指摘による加筆の例である。

ため、それを論理的につなぐ箇所が必要となるのは当然で、グリム兄弟が昔話を好き勝手に話を膨らませたわけではない、と解釈している (Freitag 1929 S. 35f.)。

同様にシュミットも、こうしたグリム兄弟の加筆により、全体的に不均質なものであった 1810 年手稿が、初版ではまとまりがあり統一のとれたものになったと、好意的に評している (Schmidt 1932 S. 61)。

さて、グリム兄弟の昔話からは、今日の民俗学で言うような民話としての「信憑性」は失われているが、第 1 節、第 2 節で考察してきたような加筆は、民話から大きく逸脱させるような性質のものではなかった。それゆえ、上記のような好意的な評価がなされてきたのであった。

それに対して、グリム兄弟の昔話が創作昔話に近づいたと指摘される書きかえは、批判的に捉えられることが多いのだが、それらは次節でまとめて考察していく。

### 第 3 節 創作昔話の文体に近づいた加筆

創作昔話の文体に近づいたように見えるこの種の書きかえに関しては、本論第Ⅲ部での比較考察にも用いるため、ここで少し詳しく紹介しておく。

#### 1. 詳しい描写

「白雪姫」(KHM 053) の 1810 年手稿では、白雪姫に同情した小人たちは、自分たちのところに留まって食事を作ることを、次のように頼むだけであった。

小人たちは白雪姫をかわいそうに思って、ずっとここにいて、自分たちが鉱山に行っている間に、**食事を作っていてくれ**と頼みました (S. 246f.)。

それが初版では、小人の家に留まるための条件が次のように詳しく (直接話法で) 語られるようになっている。

小人たちはかわいそうに思って、こう言いました。「もしもあなたが、家事をしてくれて、料理をしたり、針仕事をしたり、ベッドを整えたり、洗濯をしたり、編物をしてくれて、家中をきちんときれいにしておいてくれるなら、私たちのところにいいよ。あなたも決して不自由しないでしょ。私たちは夕方帰ってきます。それまでに、食事を作っておいてください。日中は、私たちは鉱山に行って、金を掘っています。だからあなたはひとりきりです (S. 251)。

1810 年手稿に比べて『昔話集』の初版では、家庭の状況や生活必需品の記述がより詳しくなされていることに、フタイタークが着目している。そして、昔話が主に女性によって培われたものであるため、女性にとって非常に重要なこれらのことが特に愛情をこめて描写されたのであろうと解釈している (Freitag 1929 S. 64)。

その他、登場人物の描写も詳しくされるようになっている。例えば「強盗のお嬢さん」(KHM 040) では、地下室に座っているお婆さんについては、第 2 版では「ひどく歳をとっ

た」ということが語られるのみであったが、第3版から「頭をがくがくさせていました」(wackelte mit dem Kopfe)<sup>1</sup>という描写が付け加えられた。

登場人物の動作もまた、より詳しく描写されるようになっていく。「若い大男」(KHM 090)においては、大男が「小さな親指小僧を取り出して、連れて行って」しまうのだが、第7版では大男は「小さな親指小僧を二本の指で慎重につまみ上げて、じっと見つめると、何も言わずに、小僧を連れて行って」しまうことになっている。

さらに、改版の過程で女性の美しさがより詳しく形容されるようになったということをショーフが指摘している (Schoof 1959 S. 178)。同様に1810年手稿の「いばら姫」(KHM 050)においては、「すばらしく美しい」(wunderschön)という言葉が一度も使われていないだけでなく、いばら姫の美しさも特に描写されてはいなかった。しかし初版では、いばら姫が「すばらしく美しい」(wunderschön)と形容されるようになっている。

一方「つぐみのひげの王さま」(KHM 052)においては、王女の美しさを表す形容詞の「すばらしく美しい」(wunderschön)が、第6版より「並外れて美しい」(über alle Maßen schön)と書きかえられ、王女の美しさが強調されている。

「白雪姫」(KHM 053)においても、白雪姫の愛らしさが強調され、第2版より「かわいい」(lieb)という形容詞が添えられている。その一方で、継母の意地の悪さが強調されたのである。1810年手稿では、単に妃(Königin)と記されているのみであったが、第2版より「意地の悪い女」(das böse Weib)と言い換えられただけでなく<sup>2</sup>、その性格描写もなされている。ショーフはこれを、修辭的な芸術的手法としての対比と見なしている (Schoof 1959 S. 178)。

また、「水の精」(KHM 079)においては、初版刊行に際して以下のように描写が詳しくされたのだった。

#### 1810年手稿

兄と妹が水の中に落ちました。そして水の精に捕まりました。水の精は、たいへんな仕事を与えました。そして妹は、穴のあいた樽に水をそそがされ、少年は切れない斧で木を伐らされます (S. 284)。

#### 初版

兄と妹が泉の近くで遊んでいました。そして遊んでいるうちにふたりとも中に落ちてしまいました。そこには水の精がいてこういいました。「おまえたちは、私のものだ。さあ、私のためにせつせと働いてもらおうか！」そして少女には、もつれてぐちゃぐちゃの垂麻を渡して紡がせました。少女はまた、穴のあいた樽に水を運ばなければなりません。少年は、切れない斧で木を伐らなければなりません (S. 285)。

<sup>1</sup> 年寄りが頭をがくがくさせるという表現は、KHM 015, KHM 049にも見られる。KHM 015には Die Alte aber wackelte mit dem Kopfe und sprach..., KHM 049には Da sah er eine alte Frau mit wackelndem Kopfe, とある。

<sup>2</sup> 白雪姫を紐で殺そうとした後の場面。Das böse Weib aber, als es nach Haus gekommen war, ging vor den Spiegel und fragte... (S. 228) それから最後の場面。Wie das böse Weib das hörte, erschrak sie und ward ihr so angst,... (S. 232) (どちらも第2版からの引用である。)

さらに、「蛇の話」(KHM 105)の第一話においても、蛇が宝物をくれる場面が、詳しい描写とともに付け加えられた。

#### 初版

蛇がいつもミルクしか飲まず、パンを残しておくのを見ると、その子はスプーンを取って……(S. 114)

#### 第5版

蛇も、感謝の気持ちを示しました。なぜなら子どものために、隠している宝の中から、あらゆるすばらしい物、輝く石やパールや金のおもちゃを持って来たからです。しかし蛇はミルクしか飲まず、パンを残していました。そこでその子はあるときスプーンを取って……(S. 111)

また、しばしば言及される例であるが、「いばら姫」(KHM 050)の中で王子がいばらに囲まれた城に入っていく場面の描写は、次のように大幅に加筆されている (Lüthi 1998 S. 16f.他)。

#### 1810年手稿

さて、王子が城の中に入ると、眠っている王女にキスをしました。そして全てが眠りから目を覚ましました。それからふたりは結婚しました。もしふたりが死んでいなければ、ふたりはまだ生きているでしょう (S. 108)。

#### 第7版

城の中庭で王子は、馬とぶちの猟犬が横になって寝ているのを見ました。屋根の上には鳩がとまっていて、頭を羽の下にうずめていました。王子が建物の中に入ると、蠅は壁で寝ていました。コックの手は、台所で見習いの少年をつかまえようとしたまま止まっていた。そして女中は、黒い鶏の前で、羽をむしりとろうとして座ったままでした。さらに奥に行くと、広間では家来が全員横になって寝ているのを見ました。王座には、王と王妃が横になっていました。さらに先に行くと、すっかり静まり返っていて、自分の息づかいも聞こえるほどでした。ついに王子は塔につきました。そして小さな部屋のドアを開けると、そこにはいばら姫が眠っていました。寝ていたいばら姫があまりに美しかったので、王子は目をそらすことができず、かがんでキスをしました。王子がいばら姫にキスをして触れると、いばら姫は目を開けて眠りから覚め、とてもやさしく王子を見つめました。そしてふたりは一緒に降りていくと、王が目を覚まし、それから王妃や家臣たちも目覚めて、目をまるくして互いに見つめあいました。中庭の馬は起き上がり、身震いしました。猟犬は跳ね起きて、尻尾を振りました。屋根の上の鳩は、羽の下から頭を出して辺りを見回すと、野原に飛んでいきました。壁にいた蠅は、這って進みつづけました。台所の火は立ち昇り、ゆらめいて、食べ物を煮ました。焼肉はまたじゅうじゅう音をたてはじめました。コックは少年にびんたを食らわせたので、少年は悲鳴をあげました。女中は鶏の羽をむしり終えました。それから、王子といばら姫の結婚式がとても盛大に行なわれ、ふたりは死ぬまで楽しく暮らしました (S. 260)。

このように、1810年手稿から最終版の間に文章がおおよそ8倍もの長さに増やされているのである。もちろん、1810年手稿は出版するという意図のもとに書かれておらず、覚え書きのような性質のものであるため、単純に比較することには問題があるが (Schmidt 1932 S. 7)、「いばら姫」(KHM 050) は、明らかに創作昔話に近づいたと言われる例である。

## 2. 登場人物の心理描写

次に、登場人物の心理が詳しく描写されるようになっていくことに着目したい。「狼と7匹の子やぎ」(KHM 005) では、(子やぎを騙すために) 足に白い粉をふりかけてくれという狼の願いを粉屋が断る理由として、第5版より「粉屋は「この狼は、誰かをだまそうとしているな」と思ったので、断りました」という文章が付け加えられた。

「蛙の王様または鉄のハインリヒ」(KHM 001) の蛙は、友達になることを王女が約束するならば、泉の中に落ちたまりを取ってくると申し出る。1810年手稿においては、蛙が約束を促すと王女は即座に了解していた。しかし初版では王女の打算的な考えが次のように描写されている。

### 1810年手稿

そして彼女(王女)がそれを約束すると、彼(蛙)は水にもぐり (S. 144)、

### 初版

王女は、ばかな蛙がなにをべちゃくちや言っているの、蛙はどのみち水の中になければならないんだし、でもひょっとしたら蛙はまりを拾ってくることも出来るかもしれないわ、だから、はい、と言っておこうと思って、こう言いました。「ええ、かまわないわ。まず私にまりをとってきてちょうだい。全部約束するから。」蛙は頭を水につけると、下に潜っていきました (S. 145)。

## 3. 理由づけの描写

そして、描写が詳しくされていく中で、特に具体的・合理的な理由づけがなされるようになった例がある。

「12人の兄弟」(KHM 009) では、鳥になってしまった12人の兄を救うため、7年間口をきくことが出来ない娘がいる。娘は王に見出され、王と結婚する。しかし一言も口をきかない王妃を快く思わない義母(姑)が、王妃の悪口を言い始めるのである。その場面に次のような言葉が書き加えられた。

### 第2版

……あの女が口がきけなくてひとことも話さないといっても、笑うことくらい出来るでしょうに。でも笑わない人は、心にやましいところがあるのでしょうか。」王は最初はそんなことを信じようとはしませんでした。でも彼女(王の母親)がしつこく言ったので、ついに王も言い含められてしまい、妃に死刑を言いわたしました (S. 52)。

### 第3版

……あの女が口がきけなくてひとことも話さないといっても、笑うことくらい出来



るでしょうに。でも笑わない人は、心にやましいところがあるのでしょうか。」王は最初はそんなことを信じようとはしませんでした。でも年寄りの女（王の母親）がしつこく言いつづけ、妃にいろいろな罪をなすりつけたので、ついに王も言い含められてしまい、妃に死刑を言いわたしました (S. 65)。

王は、愛する妃を処刑することに同意するのだが、そこに至る理由として、上述の言葉が加えられたのである。これはさらに、義母が最後に残酷な罰を受けることの根拠ともなるものであり、筋のつながりに緻密さをももたらすものである。

何度も指摘してきたように、1810年手稿は覚え書き的な性格のものであったため、『昔話集』初版刊行に際して、補われなくてはならない点があったのは確かである。初版までの加筆を考察したフライタークは、グリム兄弟によって付け加えられた描写や説明でさえも余分だと感じられることは稀である、とやはり好意的に評価している (Freitag 1929 S. 44)。しかし初版以降にも、さまざまな描写や人物の性格描写が増やされていったのであった。

そのことに対してショーフは、ヴィルヘルムが昔話に多くのものを織り込み、文体も変化させた結果、自然さや民衆的な調子の新鮮さは幾分損なわれたと指摘するものの、結局のところグリム兄弟は忠実に集めようとしていたという見解に基づいて論を進めており、もとより脚色するつもりで昔話を入手していたブレンターノの手法と対比させる形をとっている (Schoof 1959 S. 16, 153f.)。

しかし、「いばら姫」(KHM 050)のように、明らかに創作昔話に近づいているものもある。「いばら姫」の最終版についての、リュウティの以下の分析は的を射ていよう。

グリム兄弟は、滑稽な細密描写をすることによって、この出来事（目覚めの場面）をより明確なものにするという誘惑に逆らうことができなかった (Lüthi 1992 S. 20)。

ゆきすぎた描写は、純粋な民話の文体——話の筋のポイントだけを記述する簡潔な文体——に反している (Lüthi 1992 S. 21)。

民話の特徴としてリュウティが指摘している特長のひとつに、「抽象的様式」がある。つまり、民話は、人や物の個性化を放棄しており、詳しい描写をしないものなのである (Lüthi 1992 S. 25ff.)。ところがグリム兄弟は、「いばら姫」においては詳しい描写を加えたことにより、抽象的様式を弱めてしまったのである。

リュウティが指摘する特徴にはさらに「平面性」がある。民話は、登場人物を記述する際に、具体的、立体的に述べないで、図形的に述べる。精神的にも奥行きがなく、人物には内面的世界がない。時間的な奥行きもない。リュウティは、シュレスヴィヒ＝ホルシュタインで口頭伝承から集められた話を考察した結果、口承のものではそうしたことには一切言及がないことを報告している<sup>1</sup>。口承の民話においては、喜びや苦しみは、祝宴を催し

<sup>1</sup> グリムの『昔話集』に収録されている「6羽の白鳥」(KHM 049)の中で、妹は白鳥の姿にさ

たり泣いたりという目に見える形で表現されるもので、苛酷な試練に耐える登場人物の内面については、語られないのが普通なのだ (Lüthi 1989 S. 47, Lüthi 1989 S. 39ff.)。一方グリム兄弟の昔話では、本節で指摘したとおり、例えば「蛙の王様または鉄のハインリヒ」(KHM 001) において、王女の考えていること (心理) が詳しく記述されるようになっている。これは、平面性に反しており、口頭伝承の民話の文体からは離れ、創作昔話に近づいた点であると言える。

同様のことが本節の「理由づけ」に関しても言うことが出来る。

完全に理由づけされた民話は、もはや民話とはいえない。それは、単に口承での方が書承の場合よりも大雑把に語られるからというだけでなく、どんな形にせよ理由づけしないことが、民話の概念の一部をなすからである (Lüthi 1975 S. 82)。

こうして『昔話集』は、創作昔話に近づけられたと言えるのだが、では、同時代の創作昔話と比較した場合どうであるかという疑問が生じる。それについては第Ⅲ部で確認したい。

#### 第4節 子ども向きの本としての加筆

これまでは、グリム兄弟の『昔話集』がどのように書きかえられたのかを、形式的な面に着目して考察してきた。結局のところ、この分野で一番まとまった考察を行ったのはトヌラとフライタークであったが、彼らには社会史的な関心が欠けていた。しかしグリム兄弟も時代的な影響からは免れていない。本節では、そうした角度からグリム兄弟の書きかえを見ていく。

グリム兄弟が『昔話集』と取り組んだのは19世紀の前半であった。この時期は、ビーダーマイヤー期とも呼ばれている時代である。この時代の諸現象を担う中心的役割を果たしたのは、他ならぬ中流の市民 (Bürger) である。貴族や農民の間では伝統的な規範などが長期間に渡って残されていたのだが、市民の間では、経済社会の変化に伴って生活全般で変化が生じていた (Weber-Kellermann 1979 S. 98)。

19世紀産業革命の影響で、それまで家父 (Hausvater) のもとに形成されていた「全き家」が、市民層を端緒として崩壊し始め、核家族が次第に主流を占めるようになっていた (Weber-Kellermann 1974 S. 102, 1991 S. 23)。そして「全き家」では労働力だった妻や子どもたちが労働から解放され、夫だけが住居とは切り離された仕事場で働くようになったので

---

れてしまった兄たちを救済するために6年間口をきいてもいけないし、笑ってもいけないことになる。義母の計略にはまり、火あぶりの刑に処せられることになるが、口がきけないため、弁解もできない。火あぶりになる日が、ちょうど6年目の最後の日で、6羽の白鳥が飛んで来るのを目にした妹の様子は、「喜びに胸がふるえました」と描写されている。(これは初版にはなかった描写である。) これに対してもリュューティは、文学的な飾りつけであることを指摘し、シュレスヴィヒ=ホルシュタインの口承の話にはそうした描写がないことを指摘している (Lüthi 1989 S. 47)。

ある。そうして家に残ることになった妻は、所帯の切り盛り、子育て、庭仕事などに専念するようになっていった (Rosenbaum 1982 S. 252)。教会、台所、子育てのいわゆる 3K が市民婦人の生活世界として讃えられるようになり、働き者でやさしいという理想の主婦像が形作られていったのもこの時期である (Weber-Kellermann 1974 S. 75, 100ff., 1983 S. 62, 1991 S. 23)。

かくして市民の間では、私的な生活世界が感情優位の領域として位置づけられていったのだが、ヴェーバー＝ケラーマンは、これを「家族の内的領域の情緒化」と呼んでおり、ビーダーマイヤー期を決定的に特徴づけるものとしている (Weber-Kellermann 1974 S. 107)。そうした家族崇拜の意識が頂点を迎える中で作られていった理想の家庭像は、次のようなものであった。

社会的地位を決定するのは父親で、母親は家内を整え、ふたりは夫婦としての愛情 (それがどんなものであっても) で結ばれ、子どもを礼儀正しく、躰よく養育するという関心を共有する (Weber-Kellermann 1974 S. 107)。

こうして子どもの教育にも関心が向けられるようになっていったのである。アリエスらの研究によって知られているように、ヨーロッパ中世の社会では「子ども期」が欠如しており、乳幼児期を過ぎると、子どもはすぐに大人の社会に組み入れられ、大人たちに混ざって労働や遊びを共有していたのであった。しかし 19 世紀頃より「子ども期」の独自性が認識されるようになり、少なくとも市民の子どもたちは、以前のようにすぐに仕事の世界に入りはせず、子どもとして扱われる期間が長くなったのであった。そして、子育てに専念出来るようになった母親から十分な世話を受けられるようになっていたのである (Rosenbaum 1982 S. 282f.)。

そのような背景のもと、子ども向けの服や子ども用の部屋が作られるようになっただけでなく、子どもの本の世界にも変化が生じていたのである。

ヨーロッパで子ども向けの本が書かれるようになったのは、18 世紀中頃からと一般には言われている。それ以前には、子ども向けの本が僅かしか存在しなかったため、子どもは小さな頃から、難解で理解し難い本を手にするか、大人と混じって「民衆本」(Volksbuch)<sup>1</sup> や「一枚絵」(Bilderbogen)<sup>2</sup>を眺める他はなかったのである。たとえ子ども向けに書かれた本があったとしても、それは宗教色の濃いものや、ABC 読本や行儀作法の本であった。

娯楽文学的な本や絵本の出版が本格的に始められたのは、18 世紀後半頃であった。ドイツではまた、1760 年代より子ども向けの雑誌の出版数が急増している。この背景には、子どもの教育に関心を持った市民らが、それらをすすんで子どもたちに買い与えていたことがある。貴族は娯楽や政治に忙殺されており、子どもを構う暇を持ち合わせていなかったし、下層の人々は生活に精一杯でそうした余裕を持ち合わせていなかった。対して 19 世紀

<sup>1</sup> 民衆本は 15-6 世紀に成立したもので、民間伝承などに木版が添えられて、廉価で売られていた本である。これについては、本論第 II 部第 1 章を参照。

<sup>2</sup> 15 世紀頃からヨーロッパに広まっていた、廉価の絵入り新聞のようなもので、読み書きのできない人々に通俗的な知識を与えたり、新聞のような内容を伝えるだけでなく、歌・詩・昔話など幅広いテーマを扱っていた (野村 1994 S. 8ff.)。

前半に増大した大学出の知識階級（教養市民層）には、貴族のように束縛されるものもな  
いかわりに、地位が保障（世襲）されていたわけでもなかった。そのため大学で学び教養  
を身につけることが出世のための有効な手段だったのである（Rosenbaum 1982 S. 251ff.）。  
教育の持つ意味が増し、親は子どもの能力に適した教育を求めるようになった。そして夫  
婦の共通の話題かつ課題として子育てがクローズアップされるようになっていったのであ  
った（Rosenbaum 1982 S. 278ff.）。

こうした背景のもと、市民層の人々がグリム兄弟の『昔話集』の熱心な需要者層を形成  
していった。彼らは子どもに手渡すことの出来る本としての『昔話集』を望んでいたの  
である。

そういう背景からなされたと思われる書きかえを以下でいくつかとりあげる。

### 1. 道徳的にした加筆に関して

ビーダーマイヤー期に生まれたのは、一定の教養を持つことを重んじ、家庭的なくつろ  
ぎを好み、贅沢を排し、常識をわきまえて折り目正しい生活を送るという市民的な生活様  
式であった（玉川 1991 S. 108）。そして、「秩序」（Ordnung）、「勤勉」（Fleiß）、「儉約」  
（Sparsamkeit）といった徳が尊重された（Zipes 1989 S. 21）。

それゆえグリム兄弟の『昔話集』も、熱心な需要者層を形成していた市民の期待に応え  
るような形で、昔話に躰や教訓といった要素が盛り込まれていった。

例えば「赤ずきん」（KHM 026）では、母親の言葉の中に以下のような、子どもを躰ける  
言葉が第6版から追加された。

「それから、お祖母さんの部屋に入ったら、おはようございますと言うのを忘れな  
いんですよ。あいさつをする前から、そこらじゅうをきよろきよろと見回してはいけ  
ませんよ」（S. 162）。

「怠け者の糸紡ぎ女」（KHM 128）では、怠け者の妻は、夫が二度と「糸を紡げ」と言わ  
ないように仕向けており、それが見事成功している。この話は、初版では次のように終わ  
っていた。

（夫は）それからというもの、糸のことや紡ぐことについては一切妻に口出ししなく  
なりました（S. 223）。

しかしこの後に、第4版から次のような言葉が付け加えられた。

でも、こんなのはいやな女だって、あなたも言わずにはいられないでしょう（S. 228）。

トヌラはこれを、形式からみて語り手の介入の例に分類しているが、「その意図を考慮に  
入れるならば、これを道徳的な内容の追加の中に分類することも出来る」（Tonnelat 1912 S.  
149）とも述べているように、やはり勤勉を賞賛するという教訓的な意図から付け加えられ  
たと見るのが妥当だろう。

「蛙の王様または鉄のハインリヒ」(KHM 001)の王女は、蛙と交わした約束を守ろうとしない。そのため蛙は、城まで追いかけてくる。嫌がる王女に対して、王が約束を守るように命令する場面は、次のように書きかえられている。

#### 1810年手稿

ところが、王が再度それを命じたので (S. 146)、

#### 初版

すると王は怒って、彼(蛙)と約束したことをするように不機嫌に命じました (S. 4)。

#### 第2版

王は、怒って王女を見やり、こう言いました。「おまえが約束したことは、守らなくてはならない。蛙はおまえの仲間だろう」(S. 11)。

#### 第4版

王は、怒ってこう言いました。「おまえが困っていた時に助けてくれた者を、後になってないがしろにしてはならない」(S. 4f.)。

このように、父王は教訓めいたことを口にするようになっていく。この箇所は、最終版は第4版と同じである<sup>1</sup>。

また「悪魔と悪魔のお祖母さん」(KHM 125)では、窮地に陥った兵のひとりが、悪魔(火の竜)のお祖母さんの所に助けを求めに行く場面がある。初版では「とても美しい男だったため、お祖母さんはかわいそうに思って」助けてあげているのだが、第6版からは「お祖母さんは男が気に入ったので、かわいそうに思って」助けている。このように、他人を容貌で判断することをやめさせているのも、道徳的配慮からであろう。

同様に、改版の過程で、悪行は罰せられ善行は報われるようになっていく。これも子どもを考慮して行われた書きかえである。

例えば「強盗のお婿さん」(KHM 040)では、強盗らは死刑にされるのだが、その理由として「悪行の報いとして」という言葉が初版で付け加えられた。

それに対して「金のがちょう」(KHM 064)では、小人が毎回「抜け作」に手を貸す理由を、小人自らが次のように説明している。

「私がこうしておまえにすべてをしてあげるのも、おまえが私に親切にしてくれたからだ [...]」(S. 307)。

これは1810年手稿にはなく、初版から語られるようになったものである。同様に、最後に幸福を手にする登場人物は、善人であったことが描写されるようになっていく。(「悪魔と悪魔のお祖母さん」(KHM 125)などの例がある。)

また『昔話集』は、後の版になるほど敬虔さが強められる傾向がある。これも「子ども

<sup>1</sup> この部分の加筆については、諺・慣用句という観点からの考察もある (Rölleke 1988 S. 28)。

のための本」ということが考慮されるようになったためだろう。第2版以降に書きかえられた部分には、神 (Gott) という語が多く見られる (cf. 小澤 1996 S. 146)。ただし『昔話集』の最終版で、神 (Gott) が登場人物として現れるのはただの7篇にすぎないのだが<sup>1</sup>、以下の例のように「神に祈る」、「神に身をゆだねる」といった表現が増やされているのである。そうして登場人物は、改版の過程でより敬虔になっている。例えば「兄と妹」(KHM 011) では、妹は「日が暮れて、眠くなると」「頭を子鹿の背中にのせ、それを枕にして」寝るのであるが、第2版以降は、「お祈りをすませた後」に初めて頭を小鹿の背中にのせて寝ている。

「ヘンゼルとグレーテル」(KHM 015) においても同様の傾向が見られる。親に捨てられることを知って泣き出したグレーテルをヘンゼルが慰める場面に、次のような言葉が書き加えられている。

#### 初版

「大丈夫だよ、グレーテル。安心してお眠り」(S. 50)。

#### 第5版

「大丈夫だよ、妹よ。安心してお眠り。神様はぼくたちを見捨てたりしないよ」(S. 92)。

さらに神が絶対的な存在として強調される傾向もある。「唄をうたう骨」(KHM 028) の例を見てみたい。

#### 初版

何年もかかりましたが、それは隠し通せるものではありませんでした (S. 121)。

#### 第2版

けれども神様の前ではどんなことも隠し通せるものではありません。この悪事も明るみに出ずにはいませんでした。何年も経ってから... (S. 128)。

このように、悪事も**神の前**では隠し通すことはできない、ということが付け加えられたのである。

また人間の生死を掌るのも神であることが明示されるようになっている。例えば「ラプンツェル」(KHM 012) では、子宝に恵まれない夫婦によりやく子どもが授かる場面に、「神が望みを叶えてくれた」という言葉が第3版より付け加えられた。そして「腕利きの4人兄弟」(KHM 129) の最後は、「兄弟は父親と一緒にとても幸せに暮らしました」となっていたが、第3版からは「**神様の御心にかなうだけの間**、父親と一緒にとても幸せに暮らしました」というように書きかえられている。

<sup>1</sup> 「天国の仕立て屋」(KHM 035)、「賭博師ハンス」(KHM 082)、「貧乏人と金持ち」(KHM 087)、「白い花嫁と黒い花嫁」(KHM 135)、「神様の獣と悪魔の獣」(KHM 148)、「エバの不揃いな子どもたち」(KHM 180)、「麦の穂」(KHM 194) の7話で、どれも「笑話」風の話や「聖者伝」風の話である (野村 1997 S. 286)。

また、「キリスト教がグリムの昔話に及ぼした影響は、素材とモチーフの範囲にとどまり、構造には及んでいない。ただし、素材とモチーフへの影響なら数えきれないほどある」(野村 1997 S. 226) という指摘もある。

さらに「きょうかたびら」(KHM 109) で、愛する息子が死んでしまった場面は次のように描かれている。

#### 初版

あるお母さんに、7歳の男の子がいました。その子はとてもきれいでした。そしてお母さんは、その子を世界中の何よりもいとしく思っていました。ある時、その子は死んでしまいました。母親はそのことがあきらめきれずに、昼も夜も泣いていました (S. 132f.)。

#### 第2版

あるお母さんに、7歳の男の子がいました。その子はとても愛らしくきれいだったので、その子を見た人はだれでも、かわいがらずにはいられないのです。もちろんお母さんも、その子を世界中の何よりもいとしく思っていました。ある時、その子は突然病気になって、神様がご自分のところにお召しになってしまいました。母親はそのことがあきらめきれずに、昼も夜も泣いていました (S. 470)。

このように、初版では「死んだ」という直接的な描写だったが、神を使った婉曲的な表現に変更されているのが分かる。

こうして神を敬う傾向は、挿絵にも現れている。実弟のルートヴィヒ・エミール・グリムが『昔話集』第2版のために描いた「兄と妹」(KHM 011) の挿絵には、兄と妹の背後に、この話には登場しない守護天使が描かれている (Grimm 1993 S. 701)。



グリム兄弟の弟、ルートヴィヒ・エミール・グリムが『昔話集』第2版のために描いた「兄と妹」(KHM 011) の挿絵。

## 2. 性に関する事柄を遠ざけた加筆に関して

ビーダーマイヤー期に新しく生み出された市民的な生活様式においては、とりわけ表面上の「道徳的」な家庭の幸福が重んじられ、性生活は全面的にタブーとされ、「上品な」主婦や母親はそうしたことは口にしなくなっていた。とりわけ子どもに対してそうした配慮がなされたことは、想像に難くない。かくして『昔話集』において、次のような書きかえが行われたのである。

「ラプンツェル」(KHM 012) では、妊娠している妻のために、夫はラプンツェル (野ぢしゃ) を盗むが、魔女<sup>1</sup>に見つかってしまう。この場面は次のように書きかえられている。

### 初版

男は、一所懸命に謝り、妻が妊娠していること (Schwangerschaft)、そして今彼女の願いを聞き入れないことがどんなに危険であるかを話しました (S. 39f.)。

### 第3版

「ああ、好き好んでやったものではありません。やむをえなかったのです。私の妻が窓からあなたのラプンツェルをみてしまい、それが食べられなければ死んでしまうほどに食べたくなってしまったからです。」と男は答えました (S. 76)。

こうして、妻の妊娠には言及されないようになったのである。「ラプンツェル」(KHM 012) の初版にはさらに「服がきつくなった」という表現があり、それはラプンツェルが妊娠したこと、そして後に双子を産むことを暗示していた。しかし、後の版では妊娠したかどうかということは曖昧にされ、後に森の中で突如として双子が誕生している。

参考までに言及しておくならば、ヤーコプがペンタメローネの「蛇」をドイツ語に訳した際にも、こういった性にまつわる事柄を同様に避けている (Ginschel 1963 S. 141)。

## 3. 愛情を美化した加筆に関して

### 親子間の愛情

市民の間で「家族の内的領域の情緒化」が起きて (Weber-Kellermann 1974 S. 107)、家族崇拜の意識が頂点を迎え、新しい理想の家庭像が形づくられていったことは (Rosenbaum 1982 S. 252)、『昔話集』にも影響を与えている。グリム兄弟による書きかえを考察すると、親子間の愛情を美化するような加筆が行われていることが見てとれるのである。

1810年手稿の「ヘンデさん」は、周囲の人々の殺意を感じ取った主人公が、母親と洋服を交換することで母親を身代わりに殺させておき、自分は金持ちになり、その後、他の人たちが金を手に入れようとして、それを真似して母親を殺す、という恐ろしい話である。

「ヘンデさん」は初版 (第1巻) では、母親殺しのモチーフのない「またたく間に金持ちになった仕立て屋の話」(KHM 061a<sup>2</sup>) に差し替えられた。この話はさらに、第2版で「小百姓」(KHM 061) と取り替えられた。これはフィーマンが語った話であった。この話の内

<sup>1</sup> もともと仙女 (Fee) だったが第2版より魔女 (Zauberin) に変更された。外来語をドイツ語に変えたことに関しては、本章第1節参照。

<sup>2</sup> KHM 番号に付す「a」は、改版の際にこの話が削除 (交換) されたことを示す。



容に関しては、次章 (第3章) で詳しく取り扱う。

ともあれこのようにして母親殺しのモチーフが削除されたのは、やはり時代に見合った変更と言えるだろう。

加えて、子どもに対する母親の愛情がより詳しく描出されるようになってきていることも目をひく。例えば、「狼と7匹の子やぎ」(KHM 005) には、「お母さんやぎには7匹の子やぎがいて、とてもかわいがっていました」という描写があるが、第5版よりそこに続けて、「(人間の) お母さんが自分の子どもをかわいがるのと同じようにです」という言葉が付け加えられた。

さらには、子どもに酷い仕打ちをする母親が継母に変更されている。例えば「ヘンゼルとグレーテル」(KHM 015)、「ホレおばさん」(KHM 024)、「白雪姫」(KHM 053) などがその例だが、そうすることによって親子間の愛情に差し障りがないようにしたのであろう。

19世紀に台頭してきた市民層の間で、家族崇拜の意識が頂点を迎えたことは、既に指摘した通りである。そうした意識と完全に相容れない近親相姦の解釈の可能性があるところは、『昔話集』の改版においては、慎重に書きかえられている。これはまた、性という観点から見ても好ましくない事柄であろう。

例えば「千枚皮」(KHM 065) の冒頭では、自分に匹敵するような美しい人とでなければ再婚しないようにという遺言を残して妃が死んでいる。この条件を満たすのは自分の娘しかいないことに気付いた王は、娘と結婚しようとする。それに対する相談役の人々の反応が次のように書きかえられた。

#### 初版

相談役の人々は、王を言い含めようとはしましたが、無駄でした (S. 309)。

#### 第2版

相談役の人々がこれを聞くと、驚いてこう言いました。「神様は、父親が娘と結婚することを禁じています。罪を犯せば、良いことは何も起きません (S. 299)。

こうして、近親相姦に対する明確な態度が (非難) 示されるようになったのである。

さてこの娘は、その後城から逃げ出すのだが、最後に結婚することになるのは、初版では父親自身となっていた。それが第2版より、結婚する相手の王が別の王であることに書きかえられた<sup>1</sup>。

#### 夫婦間の愛情

親子だけでなく、当時は夫婦間の愛情の価値も高く評価されるようになったということが指摘されている。このことに影響を与えたのは、婚姻が愛のもとに行われるようになったことである (Rosenbaum 1982 S. 251)。婚姻に関しては、18世紀の中頃まではどの階級においても、即物的・経済的な面ばかりが考慮されていたのであった。しかし次第に市民の

<sup>1</sup> レレケにも「千枚皮」についての詳しい論文がある (Rölleke 1985 S. 175ff.)。また、板倉 1994 も参照のこと。

間で愛にもとづく<sup>1</sup>婚姻が行われるようになり、夫婦間の愛情の価値が高まったのであった。ここでは、この傾向に添う形で変えられている部分に注目してみたい。

「12人の兄弟」(KHM 009)では、姑の計略により、妃は火あぶりの刑に処せられることになるのだが、処刑の際の王の様子が、以下のように描写されている。

王は、上にいて、涙ながらにこの様子を眺めていました。なぜなら、王はまだ妃のことを愛していたからです (S. 52)。

これは、第2版から書き加えられた描写である。この王と同様に涙もろくなっているのは、「かしこい百姓娘」(KHM 094)の王である。百姓出身の妃の差し出がましい行為に怒った王は、実家に帰るように妃に命じる。しかし、一番大切なものを城から持っていく許可を与える。すると妃は王に薬を飲ませ、王自身を持ち帰るのである。妃の実家で目を覚ました王は、王より大事なものはなかった、と妃から聞かされて次のように反応している。

王の目には涙が浮かびました。そして、「妃や、おまえは私のもの、私はおまえのものだ」と言いました (S. 59)。

この中の、「涙が浮かぶ」という描写は第6版で付け加えられたものである。

この他にも、ないがしろにされる妻がもともといないことにされている例もある。

例えば「兄と妹」(KHM 011)では、森の中で見つけた美しい娘(妹)を王が城に連れて帰るのだが、初版では、王には既に妻がいる。都合の良いことに、この妻はまもなく死んでしまうので、王は連れてきた娘と結婚できるのである。しかし妻がいながら女を連れて帰ることは道徳的な問題もあるため、第2版以降は、そもそも王は妻帯していなかったことにされている。

こうして昔話の中で家庭内に不和が起きないように工夫がなされているのである。

#### 4. 残酷なものを削除し、やわらげた加筆に関して

『昔話集』第2版では、次の2話が削除された。「子どもたちが屠殺ごっこをした話」(初版第1巻22番, KHM 022a)と「飢え死にしそうな子どもたち」(初版第2巻57番, KHM 143a)である。内容を見てみれば、これらが削除された理由は明らかである。というのも、「子どもたちが屠殺ごっこをした話」では、その題の通り、子どもたちが屠殺人の真似事をして、豚の役をしていた子どもを実際に殺しており、「飢え死にしそうな子どもたち」は、貧しくなり食べるものがなくなった母親が、実の娘を殺して食べようとする話だからである<sup>2</sup>。

こうして残酷な話が取り除かれたのは、やはり親が安心して子どもに手渡すことの出来るものにしようという姿勢がグリム兄弟にあったからだろう。グリム兄弟は、とりわけ当初は「子どものためだけの読み物」という考えを否定していたものの、出版に際しては子

<sup>1</sup> この場合の愛というのは、啓蒙主義に影響を受けた道徳的・理性的なものであり、相手の道徳性を愛するといったものだったという。

<sup>2</sup> これは伝説風の話でもあるが、やはりその残酷さが考慮され削除されたのだろう。レレケに

どもの本としての期待も汲み入れるようになってきていることは、彼らの加筆から明らかである。

同様の意図で、昔話の中の残酷さも弱められる傾向にある。「12人の兄弟」(KHM 009)では、妹が誕生したために殺されそうになった12人の兄たちが、人知れず森の中に逃げ込む。それゆえ兄たちは妹を恨み、少女に出会ったら誰彼かまわず殺すことに決める。初版には「そして、11人に出会った少女は誰でも、容赦なく殺されました」という描写があったが、これは第2版で削除され、この話の中で少女が殺されることはなくなっている。

また、「3枚の蛇の葉」(KHM 016)の王女は、自分が先に死んだ時に生きたまま一緒にお墓に入る覚悟のある人しか夫にしないと誓っているが、そこに、第3版より「私を心から愛している人なら、生きていて何の意味があるでしょう」という王女の言葉が付け足された。これによって、その行為の残酷さを幾分やわらげようとしたのだろう。

さらに「名づけ親さん」(KHM 042)では、主人公は名づけ親の本当の姿(角を生やした悪魔)を見てしまう。この話は、主人公の破滅(死)を暗示する不気味な終わり方をしていのだが、第3版から、最後にこのような一文が付け加えられた。

男は恐ろしくなって、走り去りました。さもなければ、名づけ親さんがこの男にどんなことをしたか分かったものではありません (S. 197)。

この文章が付け足されたことで、男が死なずに助かることになったのである。これも聞き手に与えられる衝撃を回避したため書きかえられたものである。

## 5. なぜ変えたのか (動機に関する考察)

上記のような書きかえをグリム兄弟がなぜ行ったのかということには、直接的な要因のひとつとして、彼らに浴びせられた辛らつな批判が考えられる。

例えば、同様に昔話等を集めていたA. L. グリム (Albert Ludwig Grimm, 1786-1872年) という人物は、「ラプンツェル」(KHM 012)を槍玉に挙げて、グリム兄弟の『昔話集』を批判している (A. L. グリムについては、本論第Ⅲ部参照)。彼は1816年に刊行した『リーナの昔話集』の序文の中で、グリム兄弟の『昔話集』には「ラプンツェル」が含まれているため、「子どものための本と呼ぶことはできない」と批判している (A. L. Grimm 1816 Vorrede<sup>1</sup>)。つまり、ラプンツェルの中で妊娠がほのめかされていることが非道徳的であり、子どもを墮落させるものだといって非難したのである (A. L. Grimm 1816<sup>2</sup>)。さらに、ベルリン大学歴史学教授のリュースも「しかるべき母親や乳母なら、ラプンツェルの物語を無垢な娘に向かって顔を赤らめず話してやれるだろうか」と批判した (Schoof 1962 S. 334)<sup>3</sup>。本節で考察した「ラプンツェル」において、「妻が妊娠していること (Schwangerschaft)」が

---

よる注釈も参照のこと (Rölleke 1994 S. 540)。

<sup>1</sup> この序文 (Vorrede) には頁番号が付けられていない。引用は序文の4頁目より。

<sup>2</sup> 同序文より。「ラプンツェル」に関しての言及がなされているのは、序文の6頁目である。

<sup>3</sup> 佐藤によれば、「ライプツィヒ文芸新聞」紙上で、1815年に批判した (佐藤 1997 S. 184)。また、ビュッシングも、既に1813年に「ウィーン文芸新聞」紙上でグリム兄弟を批判していた (佐藤 1997 S. 184)。

隠されるなど、少々神経質とも言える変更が行われたことには、こういった非難が影響していることは間違いない。だからこそ「ラプンツェル」は、グリム兄弟が特に子ども向けに編纂した「小さい版」(50話からなる選集)<sup>1</sup>には一度も収録されなかったのだろう。そして『昔話集』の最終版においては、schwanger (妊娠している) という言葉は、一度も用いられていないのである。ハンス・ザックス (Hans Sachs, 1494-1576年)<sup>2</sup>から採用した話「焼かれて若くなった男」(KHM 147)においても、原典のザックスにあった schwanger という言葉を、グリム兄弟は別の表現に変えているが<sup>3</sup>、これも同様の配慮から意図的に行われたのであろう (加藤 1998 S. 87)。

さらにグリム兄弟の編纂方針に影響を与えたのは、上記のような批判だけでなく、友人アルニムからの助言もあった。そもそも『昔話集』を出版するようにグリム兄弟に促し<sup>4</sup>、出版者のライマーを紹介したのもアルニムであった<sup>5</sup>。そして『昔話集』の出版後も、アルニムは手紙で具体的な助言を与えていたのだ。

例えばアルニムは、『昔話集』初版第1巻が刊行された直後の1813年1月にグリム兄弟に宛てた手紙の中で、「漁師の話」(「漁師とその妻の話」KHM 019)が本来の子ども向けの話とは思えないこと、それから「ねずみの木の話」(KHM 047)もその残酷さゆえに適当でないと思えることなどを指摘している (Steig 1904 S. 262)。さらに、子どもが子どもを殺す『屠殺ごっこの話』(初版22番, KHM 022a)があるために、『昔話集』を子どもの手に渡すことができないとある母親が言っていたことをも伝えている。そして、こうした話が含まれていても問題が生じないように、『昔話集』の題名に「親が選んで語るための」本であることを付け加えてはどうかという提案までしていたのである (Steig 1904 S. 263)。

これに対して、ヴィルヘルムは1813年1月28日付の手紙で次のように応えている。

子どもたちにこの本を手渡したくない、という抗議をする人もいるだろうことは予想していました。一方これは、仕方のないことなのです。ある特定の人たちのために書かれた本で、全く誰の不興も買わない本などというがあつたら、挙げてみて下さい。私は、一般的に言って、純粋な人々にとっては全てのものが純粋で有益である、と考えるべきだと思うのです。例えば、私たちは家で毎晩一章ずつ聖書を読んだものでしたが、その中にだって、おそらく多くの人が、用心して除けておくだらうと思われる

<sup>1</sup> 「小さな版」は特に子どものために作られた選集である。『昔話集』第3版(大きい版)の序文には、「『大きい版』の全ての話が子どもに適しているとは考えない人の異議も考慮して、撰集として、より小さな版として、小さな一冊の本をまず1825年に出版しました」(Grimm 1980 Bd.1 S. 25f.)とある。

<sup>2</sup> ザックスとの関連に関しては、本論第II部でさらに詳しく考察する。

<sup>3</sup> ザックスによる原典とグリムが再話した昔話は、レレケの研究書で比較することができる (Rölleke 1998 S. 212f.)。

<sup>4</sup> 『昔話集』第3版の献辞は、アルニムの妻であるベッティーナに宛てられている。その中でグリムは、アルニムについてこう記している。「カッセルの私たちのところで数週間過ごした折に、これを出版するように促してくれたのが彼(アルニム)でした」(Grimm 1985 S. 11)。

<sup>5</sup> ヤーコブは1812年5月6日にアルニム宛の手紙の中で、適当な出版者(Verleger)を知らないかと問い合わせている。それに応じて、アルニムは当時自分の作品を扱っていたライマーを紹介したのであった (Steig 1904 S. 195)。

箇所がたくさんありました。[...] この『屠殺ごっこの話』は、私は子どもの頃、母親が語ってくれるのを聞きましたが、この話はまさに、私が遊ぶ時には気をつけて慎重になるようにしてくれたものなのです (Steig 1904 S. 266)。

ヴィルヘルムはさらに、ある特定の昔話を子どもに与えようとしなないことは、実際には雨は恵みをもたらしてくれるものであるのに、雨が植物をだめにするとあって、外に出さないでおくことと同じだ、と述べている (Steig 1904 S. 266)。

一方ヤーコブは上記の弟の手紙に添えて、「漁師の話」(KHM 019) や、「ねずの木の話」(KHM 047) が本来の子ども向けの話ではないというアルニムの意見に対してこう記している。

これらの <子どものための昔話> は子どもたちのためにと考え、作り出されたものでしょうか。私にはそうは思われません。それは、子どもたちのために特別なものを作ってやる必要があるのか、という一般的な問いに対しても、私がいいえと答えるのと同じことです (Steig 1904 S. 269)。

子どもたちがすぐに消化できなくても、後に理解されれば良いから、子どもにも大人と同じものを与えて構わないというヤーコブの考えがここには示されている。続けて、題名に「親が選んで語るための」ということを付け加えてはどうかというアルニムの提案にも反論を試みている。

(子どもによる) 誤解や悪用を恐れるなら、子どもの純真なまなざしが、間違った形や危険な形で模倣しそうなことを一切を目にしないように、子どもに目隠しをして、一日中見張っていなさい。しかし、そんなことはなく、逆に人間的な意識がそれを防いで、そのような猿まねはさせないでしょう。[...] 私は、全ての子どもが、この昔話集全部を随意に読み、それをそのまま放っておいてかまわないと思います。[...] この昔話集は、子どものために書かれたものではありません。けれども子どもにとっても歓迎されています。それは、私にはとても喜ばしいことです (Steig 1904 S. 270f.)。

こうしたことからみると、グリム兄弟は、原則的には子どもにも何も隠さずにそのままの形で昔話を与えることを望んでいたようだ。それにもかかわらず第2版刊行の際には、アルニムの手紙における具体的な指摘が多少なりとも考慮されたのであった。まず、初版の第22番 (KHM 022a) だった「子どもたちが屠殺ごっこをした話」が、上記の反論にもかかわらず第2版以降は削除されたことは、既に指摘した通りである。それでも、「漁師とその妻の話」(KHM 019) や「ねずの木の話」(KHM 047) は子ども向きに書きかえられることなく掲載され続けたのである。これらの事実に関しては、次章以降で詳しく考察していく。

アルニムは、その他、初版の第8番だった「包丁を持った手」(KHM 008a) に関しても、分かりにくい表現があるという指摘をしていた (Steig 1904 S. 263)。この話の場合、これがそもそもスコットランドの話をヤーコブが翻訳したものだったということもあり、第2版

からは削除されている。(外国期限のものに関しては第2章第1節13参照。)

また、初版の第20番の「勇敢な仕立て屋」の話に対して、アルニムは、子どもには理解できない言い回しが多く、これはまるで、それを専門に学んだわけではない大人が『ニーベルンゲンの歌』を読むようなものだ、と批判している (Steig 1904 S. 263)。これに対してヤーコブは、難しい表現や方言の話はとばして読めばよく、そうすればいくつかの話を後で読むためにとっておくことも出来るではないか、子どもが語彙の上でも内容の上でも理解出来るような本を手渡すことなど無理だと反論したが (Steig 1904 S. 271)、それでも結局この昔話を類話と混交し、難しい表現も削除した上で、第2版に採用したのだった。

このように書簡のやりとりからは、グリム兄弟が『昔話集』の刊行に際して、当初は「子ども」のためということさをさほど念頭に置いていなかったのに対して、アルニムは『昔話集』を子どものための本と見なし、助言を与えていたことが分かる。その彼の助言は、しかも昔話の内容に関するものだけではなく。例えば『昔話集』初版には挿絵がない上に、博学な注釈が付いており、子どもの本らしからず、このことが一般への普及を妨げているという指摘もしている。そして、学問的すぎる序文と注釈は、兄弟が発刊を予定していた雑誌にでも掲載し、画家の弟 (ルートヴィヒ・エミール・グリム) に銅版画を描いてもらってはどうか、とまで勧めていたのである (Steig 1904 S. 252)。

グリム兄弟はこの意見に従い、『昔話集』第2版第1巻の巻頭には「兄と妹」の挿絵を、第2巻の巻頭には語り手として序文の中で紹介したフィーマンの肖像画を付けた (本論 S. 15, 41 参照)。どちらも、弟ルートヴィヒが描いたものである。さらに1825年の「小さい版」には、同じくルートヴィヒによる銅版画が計7枚付けられたのであった。

しかし注釈に関しては、関心のない者はそれをとばして読むことが出来る、注釈の中には本文に掲載しても良いようなすばらしい類話が収められているとヤーコブが反論した (Steig 1904 S. 253)。それでも結局は妥協し、注釈を別冊 (第3巻) としたのであった。そして第2版に付した『注釈篇』は、『昔話集』より3年遅れて、1822年に刊行された。『注釈篇』は売行きが芳しくないこともあり、『昔話集』本体が計7回刊行されたのに対して、ようやく1856年に第3版が出たのみである。

一方、序文の方は、学問的すぎるという指摘を受けつつも『昔話集』の巻頭に付されたままで刊行された。この序文の表現にも、改版の過程で少しずつ変化が見られる。

『昔話集』初版第2巻の序文はこのようであった。

いくつかの話は、困惑させるとか、子どもには適していないとか不快なものだと非難されます。[...] そして親たちは、これを (子どもの) 手には渡したくないかもしれません。この心配は、いくつかのケースでは的を射ているかもしれませんが、しかし選択するのはたやすいことですし、全体としてみれば、そのような心配は不要なのです。[...] 正しく使うならば、何も悪いことはおこりません (Grimm 1986 Bd. 2 S. VIIIff.)

こうして、子どもたちのために特別なものを作る必要はない、という当初の態度が示されていた。第2版序文においてもまずは同様の方針が提示される。

私たちが求めているのは、ある状態や関係に関していえば、それが日常的に起こる

ことで、どうしても隠しておくことはできないというのに、それを心配して除去することで得られるような純粋性ではありません。そんなことをするのは、印刷された本の中で実現可能なことが、本当の生活でもそうだという思い違いです。私たちが求めているのは、不正なことも隠すことのない、正直な話の真の純粋性です (Grimm 1980 Bd. 1 S. 17)。

ところが、続いて以下の部分が付け足されたのである。

その際でも、私たちは、子どもの年齢に適さない表現は、この版では用心深く除きました (Grimm 1980 Bd. 1 S. 17)。

こうして徐々に子どものことが考慮されるようになっていったことは、本節で考察した書きかえにも如実に表れている。それはまた、当時の時代の受容者の期待に合うことでもあったのだ。だからといって、グリム兄弟が全てを子ども向きの無難な話にしてしまったわけではないことは、次章で詳しく考察していくことになる。

本節においては、子どものための道徳的な話を求めていた市民の期待に応える形でグリム兄弟が書きかえを行った例を考察してきた<sup>1</sup>。特にこうした時代に合わせた書きかえは、近年においてアメリカの研究者からのさまざまな批判をよんだ。

例えば、本章で考察した「蛙の王様または鉄のハインリヒ」(KHM 001)の王が娘に約束を守るように命じる場面での書きかえ(第4節1)などに対しては、グリム兄弟が昔話の父権主義的な傾向を強めたということが批判されている (Zipes 1989 S. 23)。

グリム兄弟の加筆に対しては、さらにフェミニズムの視点からの批判もなされている。本章第2節で指摘したように間接話法が直接話法に書きかえられる傾向があったが、ボティックハイマーは、そこにグリム兄弟の男女差別的な傾向を見出している。そして「灰かぶり」の書きかえにおいては、単純に間接話法が直接話法に書きかえられているのではなく、灰かぶりの直接話法による発話は意外にも減らされているが、王子、父親、継母の直接話法による発話の回数が増やされているという (Bottigheimer 1987 S. 58f.)。つまり、直接話法は、女から男へ、良い娘から悪い女へと移される傾向があるという (Bottigheimer 1987 S. 58f.)。そうして、美しく勤勉な女性はおとなしく、醜く怠惰な女性はおしゃべりであるという性格づけがなされているが、それはグリム兄弟が昔話に植え付けたものとボティックハイマーはいうのである<sup>2</sup>。

<sup>1</sup> そのように当時の文化的規範や行動規範に合わせてグリム兄弟が書きかえたため、昔話の登場人物が活動する場は中世だが、行動は19世紀初頭の人々のものだという指摘をタタールがしている (Tatar 1987 S. 48)。

<sup>2</sup> フランスのペローの「サンドリヨン」や「巻き毛のリケ」での美しい女性は、自分から発言して運命を切り拓いているが、グリムの灰かぶりは呼ばれるまで待っている、とボティックハイマーは指摘している (Bottigheimer 1987 S. 69)。

また、グリムの『昔話集』では、特に女性に対しては処罰的な態度が明確にとられているが、それはグリムが書きかえたり、入れかえたところに如実に表れているという (Bottigheimer 1987

また、勤勉さが強調される場合も、とりわけ女性の場合が顕著だという。

『子どもと家庭のための昔話集』のヒロインは、他のどんな昔話のヒロインと比べても負けないくらいよく働く。グリム兄弟は勤勉の美德を強調するどんな機会も逃さず、ことあるごとに勤勉は美しさや好もしさに関連すると主張したのである (Tatar 1987 S. 30)。

さらには、グリム兄弟が書きかえた結果、神秘的で超自然的であった昔話の世界が失われ、昔話に本来的に潜んでいた意味も失われた、そしてグリム兄弟の昔話は、単純で教訓的で合理的な世界になってしまった、という批判さえなされている (Ellis 1983 S. 63)。

このように、さまざまな批判を受けたグリム兄弟の加筆ではあるが、本論では、こうした批判はここでの紹介にとどめる。なぜなら本論は『昔話集』の「書きかえられた」ものにでなく、書きかえられても不思議ではないのに「書きかえられていない」ものに注目するからである。つまり、本節で考察してきたような時代の要請に応える形での書きかえに対して、時代の要求とは相容れないようなものも『昔話集』の中には少なからず採用されていること、そしてグリム兄弟が、全てを子ども向けの当たり障りのない話にし、単純で教訓的で合理的な世界を作り出しているわけではないことを、次章で詳しく考察していく。なぜ、それらをグリム兄弟が書きかえていないのかという理由に関しては、第Ⅱ部で考察することになる。

---

S. 52)。そしてこうした差別の根底にボティックハイマーはイヴのイメージを見ている。つまり、男は、生まれながらに潔白なアダムと結び付けられ、一方女性はイヴの罪と結び付けられる傾向が、グリムの『昔話集』にも見出せるというのである (Bottigheimer 1987 S. 94)。